

国立国語研究所学術情報リポジトリ

学習者は「ね」の意味をどのようにとらえているか： 「ね」の自然さに関する評定調査に基づく考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): "ne", expressions at the end of a sentence, how natural, measure, learning level 作成者: 堀池, 晋平, HORIIKE, Shinpei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001866

学習者は「ね」の意味をどのようにとらえているか
 —「ね」の自然さに関する評定調査に基づく考察—

How do students understand the meaning of “ne”:

A study based on an investigation on how natural the “ne” is.

堀池 晋平

HORIIKE, Shinpei

要旨

「ね」は比較的教育が手薄な項目だと言われているが、本稿ではその問題の一端を明らかにするため、自然度を評定させる方法で、学習者の「ね」のとらえ方に関する調査を行った。調査では「ね」だけでなく、その他の文末表現等も対象とし、「ね」のとらえ方との比較を行った。その結果、中級レベルの学習者を中心に、「ね」を過剰に容認しやすい傾向があること、そして学習者が評定した、「ね」とその他の形式の自然度が、母語話者の評定と逆転しているものがあることなどがわかった。このことから、学習者は実際の発話においても「ね」とその他の形式を取り違える可能性が予想され、「ね」の指導においては他の形式との対立を考慮する必要性があると考えられる。

キーワード：「ね」 文末表現 自然さ 評定調査 学習レベル

1. はじめに

話しことばにおける終助詞の役割は重要なものであり、中でも「ね」と「よ」は母語話者の使用頻度が高い（メイナード, 1993）。特に「ね」は「会話促進」「注意喚起」「発話緩和」「発話内容確認」「発話埋め合わせ」（宇佐美, 1997）といった多様な機能を持ち、学習者にとって使用困難な項目であるが、「間違って使ってしまった時に相手に与える違和感や不快感の度合いを考えると『が』や『を』よりもさらに時間をかけて『ね』や『あのー』を教えるべきではないか」（山内, 2004: 34）と、対人関係における役割を重視する指摘もある。

しかし、「ね」の意味や使用場面に関しては「情報のなわ張り」（神尾, 1990）など、抽象的な概念を用いて説明されることが多く、日本語教育への応用は困難である。現状では、「終助詞の教育は比較的手薄であり、『ね』や『よ』の使い方を体系的に指導するケースは少ない」（尾崎, 1999: 101）。そこで本稿では、日本語教育における「ね」の扱いに関する問題の一端を明らかにするため、「ね」の自然さを評定させる方法で、学習者の「ね」のとらえ方に関する調査を行った。

2. 先行研究と問題の所在

学習者の「ね」の使用を扱った先行研究としては、自然環境の児童を対象にした尾崎（1999）や、中・上級の学習者を対象とした柴原（2002）などがあり、それぞれ発話分析によって「ね」の使用を観察している。これらの研究の結果として、格助詞の習得など、統語機能の発達とともに、多用される傾向にあった「ね」が相対的に減少したこと（尾崎、1999）や、会話を促進する「ね」が使われやすく、逆に教科書等での提示がない、発話を緩和する「ね」の使用頻度が少ないと（柴原、2002）など、いくつかの使用傾向や指導上の課題が明らかにされた。

しかし、こうした発話分析による調査からわかるのは、あくまで学習者の「ね」の使用状況や使用頻度のみであり、学習者がこれらの「ね」を母語話者と同じような認識のもとで使用しているかどうかは不明である。つまり、「ね」を使用することと「ね」を習得している（「ね」の意味用法を理解している）ことは同義ではない。「ね」を習得しているかどうかを知るためには、使用された「ね」を観察するだけでなく、学習者が「ね」の意味をどのようにとらえているかということにも目を向ける必要がある。

「ね」に関する学習者の理解については、佐藤・福島（1998）が、文字化された談話資料における発話末表現の待遇レベルについて、学習者及び母語話者がどの程度自然と判断するかを段階評価によって調査している。なお、この調査では「ね」に限らず、すべての発話末表現が評価対象とされていた。調査の結果、学習者の「ね」のとらえ方が母語話者と大きく異なることが明らかにされた。具体的には、学習者は、目上の話し相手に対する表現として「普通体+ね」（例：「そうかもしないね」）を過度に許容する一方、「丁寧体+ね」（例：「そうかもしませんね」）を不自然と見なすという傾向が見られた。

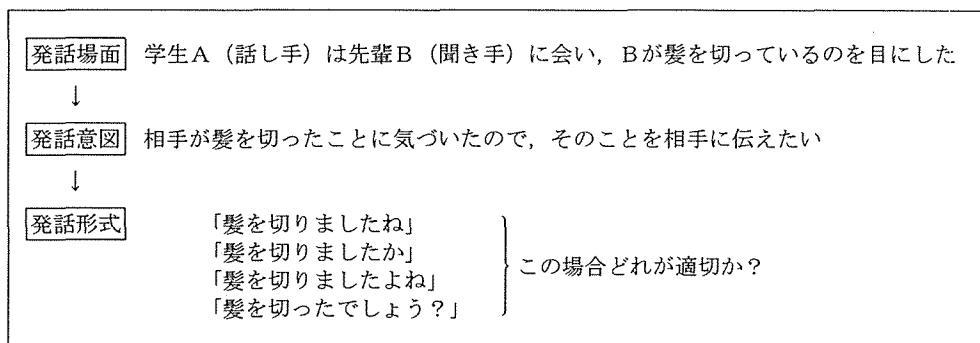
こうした結果は、学習者が「ね」の適切な使い方を理解できていないことを明らかにした点で意義深いが、一方で、この調査は「ね」だけに焦点を当てたものではないため、これは学習者の「ね」の理解に関する問題の一端に過ぎないとも言える。また、「ね」のとらえ方に関する調査としては、佐藤・福島（1998）には以下のような検討すべき課題も残されている。

まず、調査では男女それぞれ15名の学習者を対象としていたが、すべて上級学習者であり、学習レベルと「ね」のとらえ方の関係などには言及されていない。しかし、「ね」に関する学習者の理解は学習段階に応じて変化する可能性がある。学習者のレベル別にどのような違いがあるかを明らかにすることは、「ね」の指導時期や方法について考えるうえで重要な視点のひとつだと思われる。

次に、佐藤・福島（1998）の調査は、目上の相手に対する待遇レベルの認識を明らかにすることが目的であったため、目上の相手によるインタビューに応える発話が評価対象となっていた。しかし、「ね」は発話する場面や相手、さらには発話内容などによって機能が変化するものであり、こうしたインタビュー形式の発話では、「ね」に関する学習者の理解

の一側面しか調査することができない。多様な機能を持つ「ね」の認識を包括的に探るためにには、より具体的で多くの発話状況を想定して調査を行う必要がある。

最後に、調査方法の問題がある。実際の会話では、まず相手に何かを伝えたいという発話意図があり、それに応じて適切な発話形式が選択される。つまり、以下図1のように、発話において「ね」が使用されるときには、「ね」以外の文末表現との比較の上で「ね」が選択されているわけである。これに対し、佐藤・福島（1998）での、談話資料の発話を評価するという調査方法では、学習者が当該の発話における「ね」の使用をどの程度自然と判断しているかはわかるが、他の文末形式との使い分けをどのように理解しているかまではわからない。



佐藤・福島（1998）でも、このことを考慮し、不自然だと判定された「ね」を含む文末表現について、「どのように訂正するか」という質問を加えることで、学習者が考える代替表現を探っている。しかしながら、「ね」と他の形式がどのように区別されているかが客観的に明らかにされているわけではない。

以上を踏まえ、「ね」のとらえ方に関する調査上の課題をまとめると、次の3点になる。

- (1) レベルの異なる学習者を調査対象とすること。
- (2) より多様な発話場面を設定し、「ね」の機能による認識の違いを調査すること。
- (3) 「ね」以外の形式の使用に関する認識も調査し、「ね」との比較を行うこと。

本研究では、これらの課題を踏まえ、調査を実施した。

3. 調査

調査対象の学習者はおよそ中級から超級までの18名で、OPI判定（3名の学習者）、日本語能力試験の結果（全員が過去に受験）と滞日歴を考慮して中・上・超、各6名の3グループに分けた。各グループのレベルの詳細は表1の通りである。また、比較対象として日本語教育経験のない日本語母語話者6名（20代の大学生、男女各3名）に対しても調査を行った。

[表1：各グループにおけるレベルの詳細]

グループ	詳細
超	OPIで超級の判定、及び日本語能力試験1級を有する（3名） 日本語能力試験1級を有し、かつ滞日歴が6年以上（3名）
上	日本語能力試験1級を有し、かつ滞日歴が2年半から5年（6名）
中	日本語能力試験2級または3級を有する（6名）

調査では、設定された場面における発話として「ね」を含むいくつかの形式を提示し、それぞれがどのくらい自然であるかを5段階で評定させた（計14問）。以下に問題例を示す。なお、実際の調査問題では、このほかに学習者の理解を助けるために場面・状況を表した絵を提示し、説明文や会話文の漢字にはすべてルビを付した。

問題例

あなたはゼミの飲み会に参加しています。飲み会はまだ続いているのですが、あなたは明日テストがあるので、帰って勉強しなければいけません。そろそろ帰ろうとしたら、ともだちの伊藤さんに、もう帰るのかと声をかけられました。

伊藤さん：あれ、もう帰るんですか？

あなた：すみません、明日テストが ①あるんです 不自然 1 2 3 4 5 自然
 ②あるんですけど 1 2 3 4 5
 ③あるんですよ 1 2 3 4 5
 ④あるんですね 1 2 3 4 5

「ね」と比較する形式については、次の観点から評定の対象とする項目を選定した。

①「ね」との混同が予想される文末形式

終助詞を中心に、「ね」との混同が予想される文末形式として、「か」「よね」「じゃないですか」「でしょう」「でしょうか」「かな」「けど」「よ」を取り上げた。（「よね」は次に述べる「他の文末形式（よ）+ね」との見方もできるが、ここではひとつの形式として定着しているものと見なし、ここに分類した。）

②「他の文末形式+ね」

単独の「ね」と「他の文末形式+ね」の意味の違いを学習者が理解できているかどうかを調べるために、「か+ね」「から+ね」を取り上げた。

③「普通体+ね」

佐藤・福島（1998）で示されたように、学習者は「普通体+ね」の形式を許容する傾向がある。これは、相手に不快感を与えかねないという意味で重要な問題であり、本研究でも再度項目として取り上げる。

④「ね」なし（φ）

「ね」と対立する形式の中には、「ですね」に対する「ですφ」のように、「ね」を使用しない形式も含まれる。これを「ね」と比較することにより、「ね」の有無による意味の違いを学習者がどう認識しているかを調べる。

調査に用いた会話文、及び評価対象とした形式は以下の通りである。実際の問題では、先ほどの問題例で示したようにすべての会話に発話状況の説明文があるが、以下では紙幅の都合上、一部を除き会話文だけを提示する。

1. 山本さん：かぜをひいてしまって、行けなくなりました。本当にすみません。
あなた：そうなんですか。最近とても寒いですね／ですけどね／ですよね／ですからね。
おだいじにしてください。
2. あなた：ええと、あそこにコンビニがありますね／ありますよね／ありますよ／あります。
そのかどを左にまがって、まっすぐ行ったところです。
3. あなた：すみません。2時から予約していたんですが、都合が悪くなってしまって…。時間を作てもらえませんか。
受付：はい、何時からがよろしいですか。
あなた：ええと、できれば3時がいいんですけど／いいんです／いいんですね／いいんですね。
4. 先生：どう？この店が一番おいしいと思うんだけど。
あなた：ええ。このラーメン、本当においしいですよね／おいしいよね／おいしいね／おいしいですね。
5. 先生：それで、レポートはもう書いたの？
あなた：すみません、まだ書き終わっていないんですよ／いないんです／いないんです／いないんですよ。
6. 先生：体調わるそうだね。大丈夫？
あなた：すみません。実はかぜをひいているんですよ／いるんですよ／いるんですよ／いるんですね。
7. (ゼミでの発表の後で質問を受けたが、難しくてすぐには答えられない。)
質問者：この問題についてどうお考えですか？
あなた：ええと…／ええとね…／ええとですね…、すみません、ちょっとお待ちください。
8. あなた：その天井おいしそうだ／おいしそうだよ／おいしそうだよね／おいしそうだね。
ちょっともらっていい？
9. (明日はゼミで花見をする予定だが、テレビの天気予報を見ていると、明日は雨が降ることだ。)
あなた：前田さん、明日のお花見大丈夫ですか／大丈夫ですね／大丈夫ですかね／大丈夫ですよね。
10. 鈴木さん：次のゼミは14日ですね。
あなた：えっ？ 15日じゃないですか／ですよね／ですね／でしょう。
11. (休み時間に、知り合いの岡田さんに「最近アルバイトが忙しい」と話していたら、質問された。)
岡田さん：アルバイトって、一週間に何回くらいあるんですか？
あなた：ええと、一週間に4日ですよ／ですよね／です／ですね。
12. Bちゃん：こんにちは。
あなた：こんにちは、Bちゃん。お母さん、いるね／いるよね／いる？／いるかな？
13. 先生：レポートは進んでいますか。提出日はこの前言ったとおりですから。
あなた：はい。ええと、たしか15日ですよね／でしょうか／ですか／ですね。
14. (雪が降っている朝にバスを待っていたら、先生が来て一緒にバスを待つことになった。バスが来るまで何か話しをしたほうがよさそうだ。)
あなた：先生、おはようございます。
先生：おはよう。
あなた：今日は寒いでしょう／寒いです／寒いですよね／寒いですね。

4. 結果

調査の結果として、各グループにおける問題の項目ごとの平均評定値を以下に示す。項目ごとに中・上・超及び母語話者グループの間で ANOVA⁴ による分散分析を行い、5%水準で有意差が認められたものについては、同じく ANOVA⁴ を用いて多重比較⁵を行った。

[表2：各グループの平均評定値]

問題1					問題2					問題3				
属性	ね	けどね	よね	からね	属性	ね	よね	よ	「ね」なし	属性	けど	「ね」なし	ね	よね
中	4.50	1.83	2.83	3.17	中	3.83	3.83	2.00	3.67	中	3.67	3.67	3.33	2.00
上	3.50	1.67	3.50	4.00	上	3.83	5.00	1.17	2.83	上	4.83	3.50	1.33	2.00
超	3.17	1.33	3.17	4.83	超	4.00	3.50	1.00	2.33	超	5.00	3.17	1.83	1.00
NS	1.83	1.00	3.33	5.00	NS	3.00	5.00	1.17	3.50	NS	5.00	2.83	1.50	3.33
F値	3.970	1.057	0.185	3.092	F値	0.952	3.014	6.667	1.012	F値	4.087	0.405	4.348	4.024
p値	0.023	0.389	0.905	0.050	p値	0.434	0.054	0.003	0.408	p値	0.021	0.751	0.016	0.022
問題4					問題5					問題6				
属性	丁よね	普よね	普ね	丁ね	属性	よ	ね	「ね」なし	ね	属性	よ	「ね」なし	よね	ね
中	3.00	2.17	3.00	4.83	中	2.50	3.50	3.50	1.33	中	2.50	4.50	2.67	3.67
上	1.17	1.00	1.83	5.00	上	1.00	5.00	1.50	3.00	上	2.83	4.83	1.33	1.17
超	2.00	1.00	2.33	5.00	超	1.33	4.67	1.33	3.67	超	3.50	4.67	1.33	1.83
NS	2.50	1.17	1.33	5.00	NS	2.83	5.00	1.50	4.67	NS	4.17	4.83	3.17	1.67
F値	2.018	10.301	2.210	1.000	F値	6.028	4.740	8.053	7.360	F値	1.536	0.470	5.053	8.776
p値	0.144	0.000	0.118	0.413	p値	0.004	0.012	0.001	0.002	p値	0.236	0.707	0.009	0.001
問題7					問題8					問題9				
属性	「ね」なし	普ね	普ね	丁ね	属性	「ね」なし	よ	よ	ね	属性	か	ね	かね	よね
中	4.17	2.83	3.00		中	3.67	2.83	3.33	4.50	中	4.83	3.33	2.83	2.50
上	4.67	1.50	2.83		上	2.17	1.17	2.67	4.50	上	2.67	2.50	2.83	3.50
超	4.50	1.83	4.50		超	2.33	1.17	1.33	5.00	超	3.67	1.33	4.33	2.67
NS	4.17	1.33	4.50		NS	1.50	1.50	2.67	5.00	NS	2.17	1.00	5.00	3.83
F値	0.517	2.642	3.168		F値	3.410	4.722	2.147	1.111	F値	4.854	6.253	3.050	0.787
p値	0.675	0.077	0.047		p値	0.037	0.012	0.126	0.368	p値	0.011	0.004	0.052	0.515
問題10					問題11					問題12				
属性	ないですか	よね	ね	でしよう	属性	よ	よね	「ね」なし	ね	属性	ね	よね	「ね」なし	かな
中	4.50	2.00	3.00	3.50	中	3.17	2.50	4.33	3.33	中	2.83	2.67	3.50	3.17
上	4.67	2.17	1.67	4.00	上	4.33	1.50	4.00	1.50	上	1.67	2.50	4.83	2.50
超	4.50	1.50	1.00	3.67	超	3.83	1.17	4.67	3.50	超	1.17	2.00	4.83	3.83
NS	5.00	3.83	1.83	3.83	NS	4.00	1.17	5.00	4.50	NS	1.50	2.33	4.50	5.00
F値	0.465	4.219	2.582	0.165	F値	0.615	5.513	3.333	5.542	F値	2.212	0.231	2.312	3.160
p値	0.710	0.018	0.082	0.919	p値	0.614	0.006	0.040	0.006	p値	0.118	0.874	0.107	0.047
問題13					問題14					問題15				
属性	よね	でしようか	か	ね	属性	で	よ	ね	「ね」なし	属性	か	ね	かね	よね
中	3.00	2.67	2.17	4.17	中	2.17	3.33	4.50	3.17	中	2.83	2.67	3.50	3.17
上	3.67	4.33	2.67	3.17	上	1.00	3.17	5.00	1.83	上	1.67	2.50	4.83	2.50
超	4.33	2.50	1.83	3.50	超	3.00	2.17	5.00	1.00	超	1.17	2.00	4.83	3.83
NS	4.83	2.50	2.33	2.33	NS	1.83	4.33	4.83	2.00	NS	1.50	2.33	4.50	5.00
F値	1.841	1.550	0.447	2.021	F値	4.181	2.342	0.800	5.409	F値	2.212	0.231	2.312	3.160
p値	0.172	0.233	0.722	0.143	p値	0.019	0.104	0.508	0.007	p値	0.118	0.874	0.107	0.047

中=中グループ

上=上グループ

超=超グループ

NS=日本語母語話者

丁=丁寧体、普=普通体

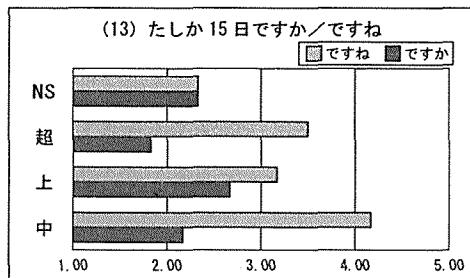
※ p 値が斜体のものは分散分析の結果、5%水準でグループ間に有意差があったこと、網掛はその上で行った多重比較の結果、平均評定値に日本語母語話者と 5% 水準で有意差があったことを示す。

以下では、先ほどあげた項目にそって、①「ね」と「『ね』との混同が予想される文末形式」の比較、②「ね」と「他の文末形式+ね」の比較、③「丁寧体+ね」と「普通体+ね」の比較、④「ね」と「『ね』なし(ϕ)」の比較を行う。

なお、以下で示すグラフ中の「*」は、分散分析後の多重比較において、5%水準で母語話者の平均評定値と有意差があったことを意味する。

①「ね」との混同が予想される文末形式

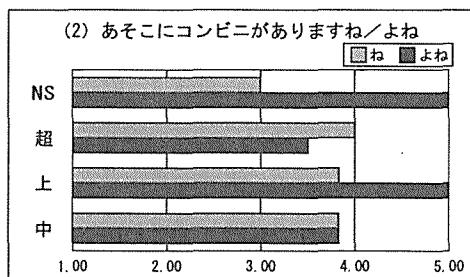
[か]



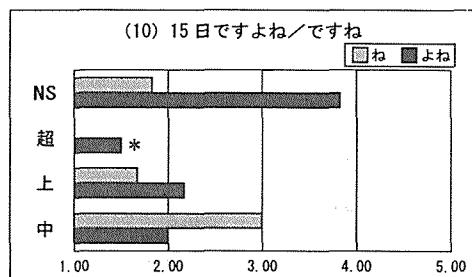
[グラフ1：問題13「か／ね」]

「か」の評定値は各グループ間に大きな差はなく、いずれのグループもやや自然さに対する評定値が低い。一方、「ね」については、分散分析での有意差は見られなかったものの、中グループをはじめとして、全体的に学習者の評定値が母語話者よりも高い傾向が見られた。

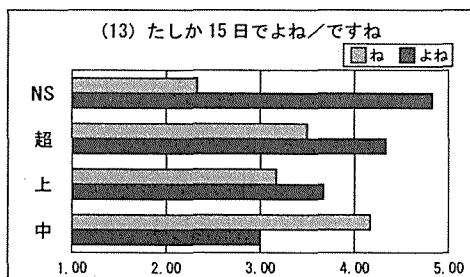
[よね]



[グラフ2：問題2「よね／ね」]



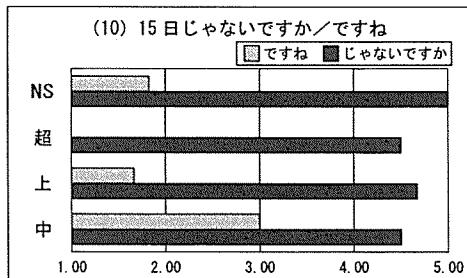
[グラフ3：問題10「よね／ね」]



[グラフ4：問題13「よね／ね」]

「よね」の評定値に関しては、全体的に母語話者は高いのに対し、学習者はやや低い傾向にある。グラフ3では分散分析後の多重比較の結果、超グループと母語話者の間に有意差が認められた ($p = 0.032$)。一方、「ね」は全体的に学習者の評定値のほうが高い。その結果、「よね」と「ね」を比べると、グラフ3、4の中グループでは「ね」の評定値のほうが高く、母語話者と逆転してしまっている。ただ、レベルが上、超グループになると、両者の評定値のパターンはやや母語話者に近くなっている。

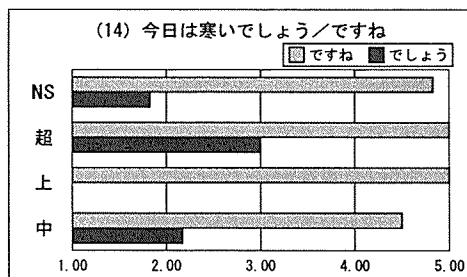
[じゃないですか]



[グラフ 5：問題 10 「じゃないですか／ね」]

「じゃないですか」については、母語話者と学習者の間にはほとんど差はない。一方、「ね」の自然さに対する評定値は学習レベルによってばらつきがある。特に中グループの学習者が、上、超グループに比べてやや高い評定値を示しており、「ね」と「じゃないですか」の評定値が接近している。

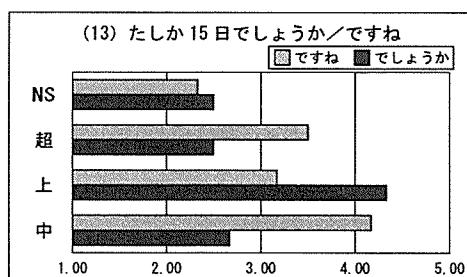
[でしょう]



[グラフ 6：問題 14 「でしょう／ね」]

「でしょう」の評定値はばらつきがあり、多重比較の結果、超グループと上グループの間に有意差が見られた($p = 0.002$)。一方、「ね」に関しては、この場面でのグループ間での違いはほとんど見らなかった。いずれのグループでも母語話者同様、高い評定値が示されている。

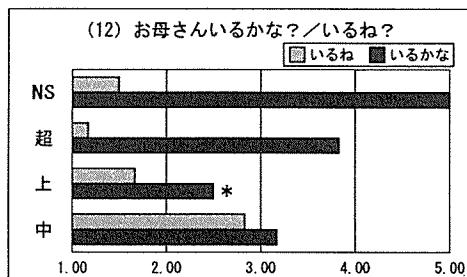
[でしょうか]



[グラフ 7：問題 13 「でしょうか／ね」]

この場面では、母語話者は「でしょうか」 「ね」のいずれも自然さの評定値が低い。一方、学習者を見ると、まず上グループの「でしょうか」の評定値が高くなっている。さらに「ね」については、どの学習者も母語話者よりもやや高い評定値を示している。なかでも中グループは、母語話者に比べ、「ね」の評定値がかなり高い。

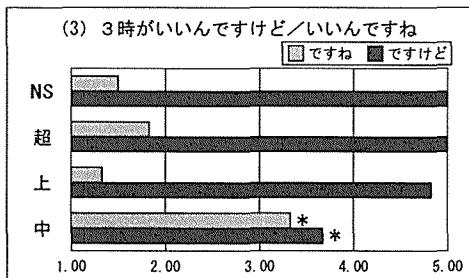
[かな]



[グラフ 8：問題 12 「かな／ね」]

「かな」に関しては、母語話者は全員 5 点の評価だった。学習者は母語話者ほど評定値が高くなく、多重比較では、上グループと母語話者間で有意差も見られた ($p = 0.008$)。また、「ね」はここでも中グループの自然度が母語話者に比べて高く、母語話者に比べて「かな」と「ね」の評定値が接近している。

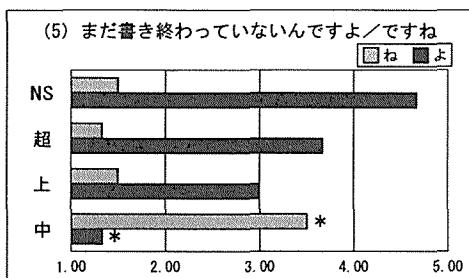
[けど]



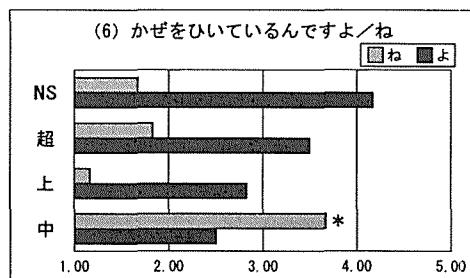
[グラフ 9：問題 3「けど／ね」]

「けど」と「ね」の評定値を比べると、上、超グループは、母語話者同様に両者の評価がはっきりと分かれているのに対し、中グループだけは評定値がかなり接近し、両者がほぼ等しくなっている。多重比較の結果でも、中グループは「ね」($p = 0.007$), 「けど」($p = 0.002$)ともに母語話者の評定値との間に有意差が認められた。

[よ]



[グラフ 10：問題 5「よ／ね」]

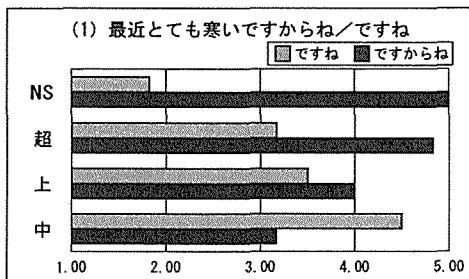


[グラフ 11：問題 6「よ／ね」]

「よ」に関しては、全体的に母語話者の評定値が高いのに対して、学習者はレベルが下がるほど低くなっている傾向が見てとれる。特に中グループの評定値は母語話者に比べ、かなり低い値になっている。グラフ 10 では多重比較の結果、中グループと母語話者間 ($p < 0.001$)、及び超グループとの間 ($p = 0.005$) にも有意差が認められた。「ね」については中グループの評定値だけが突出して高くなっている。多重比較の結果では、グラフ 10, 11 とともに、中グループと他のすべてのグループとの間に有意差が認められた。「ね」と「よ」の比較に注目すると、中グループでは「ね」の評定値が「よ」を大きく上回り、母語話者と完全に逆転している。しかしながら、上、超グループとレベルが上がるにしたがって、それが母語話者とかなり近い値になっていることがわかる。

② 「他の文末形式+ね」

[からね]

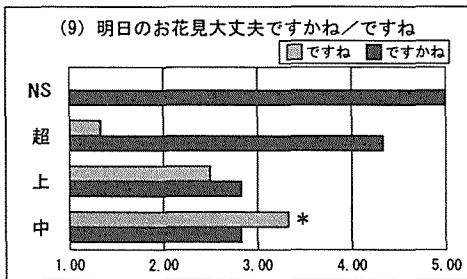


[グラフ 12：問題 1「からね／ね」]

母語話者は「からね」と「ね」の評定値に大きな差があるのに対し、学習者はそれがかなり接近している。中グループの学習者にいたっては、「ね」の評定値が高く、母語話者との間に有意差もあり ($p = 0.002$)、「からね」と「ね」の評定値が母語話者と完全に逆転して

しまっている。

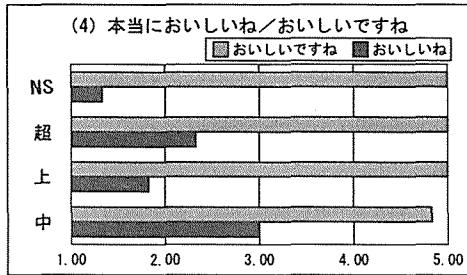
[かね]



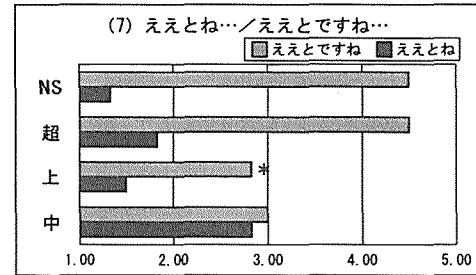
[グラフ13：問題9「かね／ね」]

母語話者は全員「かね」が5点、「ね」は1点と、両者の評価が大きく隔たっているのに対し、学習者はレベルが低くなるほどこの差が縮まっている。特に中グループでの「ね」の評定値が高くなっている。その結果、母語話者と反対に「ね」が「かね」の評定値を上回ってしまっている。

③「普通体+ね」



[グラフ14：問題4「普通体ね／丁寧体ね」]

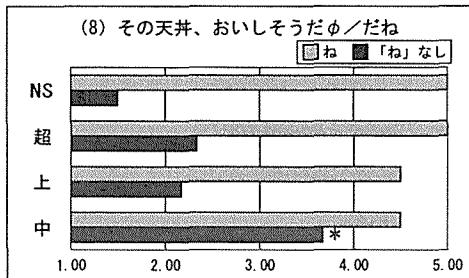


[グラフ15：問題7「普通体ね／丁寧体ね」]

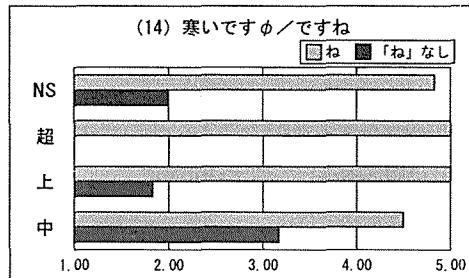
丁寧体／普通体と「ね」の組み合わせについては、ふたつの発話場面を設定した。まず「普通体+ね」の評定値に注目すると、母語話者はいずれの場面でも評定値が極めて低いのに対し、学習者は中グループを中心にそれよりもやや高い傾向が見てとれる。また、対する「丁寧体+ね」（「ですね」）の認識を見ると、グラフ14では各グループの評価にほとんど差はないが、グラフ15では中、上グループの評定値が母語話者に比べて低い。多重比較の結果では、上グループと母語話者、上グループと超グループの間に有意差があった（ともに $p = 0.033$ ）。この場面での中グループの評定値に注目すると、「ええとね」と「ええですね」の評定値がほぼ等しく、母語話者のように両者の評価が明確に区別されていない。

④「ね」なし（ ϕ ）

「ね」と「 ϕ 」の比較について、ここでは神尾（1990）、庵他（2000）を参考に、「ね」の使用が必須の場合、使用不可の場合、そして任意的に使用される場合の3つに分類して結果を見ていく。まずは「ね」の使用が必須になる場面での結果である。



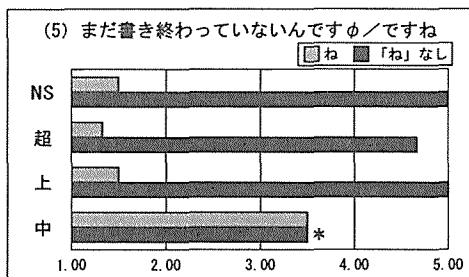
[グラフ 16：問題 8 「ね」]



[グラフ 17：問題 14 「ね」]

この場面では、「ね」に関してはどの学習者も母語話者とほぼ同様に高い評定値を示していた。ただ、もう一方の「ね」の評価に注目すると、学習者は中グループを中心に母語話者より自然度がやや高い傾向が見られ、多重比較の結果、グラフ 16 では中グループと母語話者間 ($p = 0.005$)、グラフ 17 では中グループと超グループ間 ($p = 0.001$) に有意差が見られた。中グループはいずれの場面でも「ね」と「ね」の評定値が接近している。

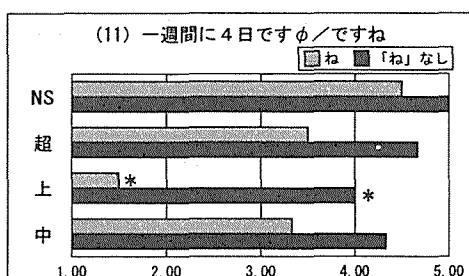
ふたつ目は、聞き手より自分に深く関係のある内容に対して「ね」を付加するもので、神尾 (1990) では、「ね」が使用不可とされている場面である。



[グラフ 18：問題 5 「ね」]

母語話者ならびに超、上グループの評定値は「ね」が高く、「ね」が低いという傾向がはつきりしている。しかし、中グループでは「ね」の評定値が高く、逆に「ね」は低い。「ね」については、母語話者及び上グループとの間に有意差も見られた（ともに $p = 0.004$ ）。その結果、中グループでは両者の評定値が等しくなってしまっている。

最後は神尾 (1990)、庵他 (2000) で使用が任意的だとされている「ね」についてである。



[グラフ 19：問題 11 「ね」]

まず「ね」の認識についてだが、母語話者が全員 5 点の評価であったのに対し、学習者は上グループでの評定値がやや低く、多重比較で有意差が見られた ($p = 0.007$)。「ね」は、母語話者がかなり自然だと評価している一方で、学習者の評定値はやや低く、特に上グループの学習者は母語話者との間に有意差も認められた ($p = 0.008$)。

5. 考察

以上、各項目の結果を見てきたが、その特徴をまとめると以下の5点になる。

(i) 特に中グループの学習者に、「ね」の使用を過剰に自然だと評価する傾向が見られる

「ね」の評価に関して、日本語母語話者が明らかに不自然だと評価している場面についても、中グループの学習者がやや高い評定値を示しているものが数多く見られた（グラフ1, 3, 8, 9, 10, 11, 12, 13）。

(ii) 全体的にレベルの上昇とともに「ね」の認識が母語話者に近づいている

(i)より「ね」を自然だと評価する傾向が見られたわけだが、これは上、超グループではなく、全体的にレベルの上昇とともに「ね」の認識が母語話者に近づいていることが観察された。分散分析後の多重比較の結果でも、「ね」の評定値について母語話者と有意差があったのは、中グループで5つ、上グループで2つ、超グループでは0であった（表2）。

(iii) 特に中グループの学習者に、「普通体+ね」の形式を容認しやすい傾向が見られる

結果（グラフ14, 15）より、丁寧体／普通体との「ね」の組み合わせについて、特に中グループの学習者は、母語話者に比べて「普通体+ね」を許容しやすく、逆に「丁寧体+ね」を不自然だと認識している傾向があることが観察された。

(iv) 「ね」の機能によって母語話者の認識に近いものとそうでないものがある

(i)より、学習者は「ね」を容認しやすい傾向が見られたが、一方で母語話者が自然だと評価している「ね」を不自然だと見なしている結果も示された（グラフ15, 19）。また逆に、どの学習者も母語話者同様に「ね」に対して高い評定値を示しているものも見られ（グラフ6, 14），各発話場面での「ね」の機能によって、母語話者の認識に近いものとそうでないものがあることが観察された。

(v) 「ね」とその他の形式の認識が母語話者と逆転しているものがある

「ね」と他の形式の比較において、学習者の評定値が母語話者のものと逆転している、またはそれに近いものが観察された。その多くは中グループの学習者（グラフ3, 4, 10, 11, 12, 13, 18）だが、上グループ（グラフ13）、超グループ（グラフ2）でも一部見られた。

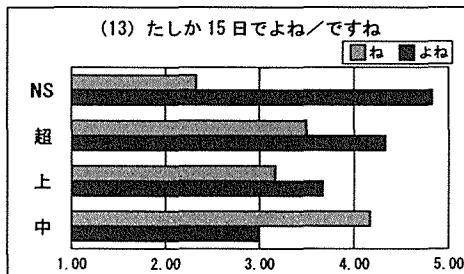
以上の点を踏まえて、日本語教育の立場から考察を行う。まず上記の(i), (ii)より、特に中グループの学習者に「ね」を過剰に自然だと評価する傾向があるが、学習段階が進むにつれ、次第に母語話者の認識に近づいていることが観察された。このことから、学習者はレベルの上昇にしたがって、母語話者と同じように「ね」が自然な場合と不自然な場合の区別がつくようになることが示唆されたといえる。ただ、「ね」の過剰な容認に対しては、使用を抑制する立場からの指導についても検討すべきだと思われる。

次に(vi)より、佐藤・福島（1998）で問題にされた、「普通体+ね」について、本調査でも、学習者がこれを自然だと評価しやすい傾向が観察された。傾向が見られたのは主に中グループであったが、こうした待遇表現に関わる形式は使用を間違えると相手に不快感を

与えるおそれがあることから、誤りとしては重要なものに位置づけられるべきである。「ね」を普通体と組み合わせて使用する形式については、たとえ学習レベルが低い段階でも注意が必要だと言える。

(iv) では、「ね」の機能によって学習者の「ね」の評定値が母語話者と近似しているものとそうでないものが見られた。具体的には、評定値がほぼ同じであったものには、「今日は寒いですね」などの「発話促進の『ね』」(宇佐美, 1997) が多く、母語話者に比べ、学習者の評定値が低かったものとしては「(自分のアルバイトは) 1週間に4日ですね」などの「発話緩和の『ね』」(宇佐美, 1997) が見られた。このことから、学習者にとっては、「ね」の中でも理解しやすい機能と、理解しにくい機能があることが予想される。先行研究においても、「ね」の機能には学習者にとってわかりやすいもの(柴原, 2002) や、教科書等での説明がなく、指導対象とされていないもの(福島, 1994) があることが述べられており、本調査の結果もこれらの記述を裏付けるものとなった。「ね」は、一般的に初級で導入されることが多く、それ以後は文法項目として取り立てて指導されることは少ない。しかし、こうした結果を考慮すると、「ね」の機能を分類したうえで、理解が困難だと思われる用法については、中・上級などでも段階的に指導していく必要がありそうである。

最後に、(v)の「ね」と他の形式の評価が母語話者と逆転している問題について述べる。こうした評価の逆転の多くは、母語話者は「ね」と対立する形式の評定値が高いが、学習者は反対に「ね」の評定値が高いというパターンであった。例として、以下に「ね」と「よね」の比較(グラフ4)を再掲する。



[グラフ4: 問題13「よね/ね」]

この背景には、学習者の評価に関する2つの傾向があると思われる。ひとつは、多くの場面で「ね」と対立する形式(この場面では「よね」)に対する自然さを、母語話者と同じようには理解できていなかったこと、そしてもうひとつは、先ほどの(i)で見た、「ね」を過剰に自然だと評価してしまう傾向である。

こうした結果は、実際の会話でも、母語話者ならば他の形式を使用するところを、学習者は「ね」で置き換えてしまう可能性を示唆しているといえよう。具体的な項目としては、調査の結果から「よね」「よ」「からね」「かね」、そして「『ね』なし」の項目について評定

値の逆転（もしくは同評定値）が見られ、「ね」との混同が予想される。これらの多くは中グループに見られた結果だが、中には「よね」と「ね」のように、超グループでも母語話者と評定値が逆転している項目も見られた（グラフ2）。これについては、先行研究においても学習者が「よね」を使用すべき個所で「ね」をよく用いることが観察されており（李, 2001），両者の区別は超級レベルの学習者であっても困難であることが予想される。

以上の結果を踏まえると、「ね」の指導においては「ね」だけでなく、他の形式にも注目したうえで、意味の違いを区別させることが重要だと考えられる。具体的には、「ね」を単独の項目として教えるのではなく、「ね」と「よね」、「ね」と「よ」のように、対立する形式と抱き合せの形で提示して、それぞれが使用される場面や条件などに注目させる指導が有効ではないだろうか。これについては野田（2001）でも、文法項目の習得に関して、文法が「使える」ということは、「は」と「が」や「らしい」と「ようだ」のような対立を習得することであるという考えが述べられている。「ね」についても同じで、「ね」を「使える」ようになるためには、「ね」と他の形式との対立を理解するという視点からの指導が必要になると考えられる。

6. 今後の課題

以上、本調査での結果とそれに基づく考察を述べたが、調査上の課題としては対象とした学習者が少数であったことが大きい。本稿では異なるレベルの学習者グループ間で、「ね」の認識に違いがあることを明らかにできたが、それらはあくまで今回対象となった学習者から得られた傾向にすぎず、調査の規模を考慮すると一般化できるものではない。統計上のデータとしても十分だとは言えず、今後は調査の規模をさらに広げ、その傾向を改めて検証する必要がある。また、調査で具体的に明らかになったのは、「学習者が具体的発話場面において『ね』（及びそれと対立する形式）をどの程度自然だととらえているか」ということの一端であり、それが実際の「ね」の運用にどの程度関与しているかは推測の域を出るものではない。

最後に、今回は学習レベルという要因に沿ってのみ調査を行ったため、その違いを観察するだけにとどまったが、今後は学習環境の違いや母語などの要因を統制し、違いを検証することで、何が「ね」の習得に影響を与えるかという研究への発展も期待される。

注

- 1 分散分析用のソフトウェアのことで、本調査ではインターネット上の ANOVA4 on the Web (<http://www.hju.ac.jp/~kiriki/anova4/>) を使用して分析を行った。
- 2 本調査では Ryan 法による多重比較を行った。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（著），松岡弘（監）（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 宇佐美まゆみ（1997）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』241-268，ひつじ書房.
- 尾崎明人（1999）「就労ブラジル人の発話に見られる助詞の継続的研究（その1）—終助詞「ね」を中心として—」『名古屋大学日本語・日本文化論集』7, 91-107.
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- 佐藤勢紀子・福島悦子（1998）「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要』4, 31-40.
- 柴原智代（2002）「「ね」の習得—2000／2001長期研修OPIデータの分析」『日本語国際センター紀要』12, 19-34.
- 泉子・K・マイナード（1993）『会話分析』くろしお出版.
- 野田尚史（2001）「文法項目の難易度」野田尚史・渋谷勝己・迫田久美子・小林典子『日本語学習者の文法習得』101-120，大修館書店.
- 福島悦子（1994）「終助詞「ね」の用法と機能：指導上の留意点」『東北大学留学生センター紀要』2, 55-62.
- 山内博之（2004）「OPIで文法を見直す（4）」『月刊日本語』7, 32-35, アルク.
- 李善雅（2001）「議論の場に見られる「ね」「よ」「よね」について—日本語母語話者と韓国人学習者との相違—」『ことばの科学』14, 41-69, 名古屋大学言語文化部言語文化研究会.

謝辞

本稿執筆にあたり御指導いただいた広島大学の松崎寛先生に、この場を借りて感謝申し上げます。